

三千歳 (忍逢春雪解)

へ冴えかへる 春の寒さに降る雨も へ暮れていつしか雪となり 上野の鐘の音もこぼる 細き流れの幾曲り 末は田川へ入谷村 へ廓へ近き畦道も 右か左か白妙に 往来のなきを幸ひと 人目を忍びたたずみて

へ思ひがけなく丈賀に会ひ 頼んでやつたさっきの手紙 もう三千歳の手へ届いた時分 門の締りが開けてあるか かどからそつと当って見ようか

へたしかにこゝと目覚への もんのとぼそへ立ちよれば 風に鳴子の音高く へ驚く折から新造が 灯したづさへ立ち出で、

へ今鳴子の鳴ったのは 風のやうでは無かつたが

へ大方こゝへ直はんが

へアゝモシ静かにしましよ

へさし足なして千代春が とぼそへよりて声ひそめ

へモシ直はんぎますか

へオツそう云う声は千代春さんかへ

へサ早くこつちへ這入んなましよ

へわちきは奥の花魁へ お知らせ申して参りんせふ

へ気転きかして奥戸口 互ひに心合鍵に とぼそを開けて伴ふ折柄

へもんの外には丑松が 内の様子を伺ひて 一人うなづき雪道を

飛ぶが如くに急ぎ行く

へやつとの思ひで忍んで来たんだ 聞きゃ三千歳は患っているそ

うだな

へそれもみんなおまはん故でありんすよ

へ晴れて逢はれぬ恋仲は 人に心を奥の間より へ知らせ嬉しく三千歳が 飛立つばかり立ち出でて 涙も涙にすがりつき

へ花魁

へ直はん

へこゝでゆつくり

へお話しなんしへ

へ廓に馴れたる新造が話の邪魔と次の間へ 粹を通して入りにける

へあとには二人さし合も へ涙ぬぐふて三千歳が 恨めしさうに顔を

を見て

へわづか別れて居てさへも

へ一日逢はねば千日の 思ひにわたしや患ふて 針や薬のしるしさへ

泣きの涙に紙濡らし 枕に結ぶ夢さめて いとど思ひのますかぎみ

へ見る度毎に面やせて どうで長らへ居られねば 殺して行つて下さ
んせと 男にすがりなげくにぞ

へ今更云うて返らぬが 悪事をなしてお仕置を 受けりや先
祖代々の墓へ入れぬこの身の上 回向院の下屋敷へ 俺れの墓
をば建つて呉れ コレがお主へおれの頼みだ

へこれが頼みと手を取りて 共に涙にくれにける へ男も愚痴にから
まれて もて余したる折からに へ始終を聞いて寮番の 喜兵衛は一
間を立ち出でて

へ斯ういふ内にも寸善尺魔 障りのないうちサア早うお逃げ
なされませ

へ実に桓山の悲しみも 斯くやとばかり降る雪に 積る思ひぞ残し
ける